

附論 3

I 区本坊地区・II 区本堂地区出土の土師質土器について

織田 誠司（鬼北町教育委員会）

1 はじめに

中世土器の研究は、各地において開発事業に関連した発掘調査が急激に増加した 1980 年代以降、飛躍的に発展した。各地で増加した中世遺跡の遺構・遺物の年代を確定するためにも、数多く出土し、耐用年数の短い在地土器の編年研究が重要かつ早急な課題として認識されるようになったためである。その後、今日まで土器の分類・編年論に留まらず、生産技術論や機能・用途論、流通・消費論など各地で研究が深化してきた。

一方、愛媛県南予地域に目を転じると、研究は極めて低調で、個別遺跡の検討例として唯一、幡上敬一氏による等妙寺旧境内の試掘調査出土資料を対象とした 14 ～ 16 世紀の編年の考察〔幡上 2005〕に留まっている。2000 年代に入って四国横断自動車道の建設に伴い発掘調査件数が若干の増加をみたものの、検討に耐えうる良好な資料の蓄積は進まず、未だ土器様相でさえも十分に明らかにされていないのである。今後の資料増加に期したいところではあるが、良好な資料の急激な増加は望めないため、現状で把握し得る在地土器様相を示し、共通認識を得ておく必要があるだろう。

そこでまず、等妙寺旧境内出土の土師質土器、I 区本坊地区及び II 区本堂地区から得られた新出資料について、今後の調査研究に資することを目的にその様相を整理してみたい。

2 既往の研究と本論の視点

（1）既往の研究と問題の所在

先行研究となる幡上氏の編年の考察では、平坦部 A－1（山王跡）、平坦部 A－2（観音堂跡）、平坦部 A（如意頭院跡）、平坦部 B、平坦部 12（福寿院跡）の試掘調査によって得られた資料を対象とし、胎土・色調、法量、形態、技法（成形、調整、底部切り離し）に着目した分類から型式を設定、それら各型式の層位的な出土状況から大きく I ～ III 期に変遷を整理する。検討資料には年代を推定し得る良好な共伴遺物がないことから、高知県西部や中予地域出土資料との比較により年代を推測している。資料的な制約を前提としながらも、層位的な出土状況と杯・皿の分類を踏まえた変遷の想定は現在でも有効と考えており、疑義はない。

しかしながら、各段階の年代的位置づけに課題を残すと同時に、近年の新出資料の中には従来の分類に当てはまらないものも出てきており、発掘調査の進捗に応じてその都度検証作業は欠かせない。また敢えて問題提起すれば、分類基準が曖昧という点が挙げられよう。現在でも同様の状況ではあるが、全体形状を残す資料が限られるため、形態、すなわち体部の開き方や口縁端部の形状での分類や型式学的検討が難しい。従って分類基準は胎土・色調、技法（成形、調整、底部切り離し）の比重が自ずと高くなってしまう。

（2）本論の視点

前述した問題意識から今回の検討では、等妙寺旧境内出土の土師質土器のうち、I 区本坊地区及び II 区本堂地区から得られた新出資料を対象とし、その様相を明らかにすることで、今後の調査研究に

資することを目的とする。

なお、本検討では様相の把握に主眼を置くため網羅を指向せず、分類記号等を用いた細かな型式（形式）は敢えて設定しない。複数の分類・編年案が乱立することで生じる混乱を避け、また現状では資料数や残存状態、出土状況などに多くの制約があり、今後の調査研究の進展に伴い大幅な修正を迫られる可能性が高いためである。よって、比較的地出土数の多いI区本坊地区出土資料については、時期差を看取できる出土状況から大きくA～D群に分け、その中で諸特徴からまとまりを捉えられるものはグルーピングし、変遷や年代を推定するという手順で検討を進めることとしたい。

3 I区本坊地区出土の土師質土器

（1）出土状況による資料群の設定

I区本坊地区出土の土師質土器は器種・器形などバラエティに富んでおり、多様かつ混沌とした状況が窺われた。そこでまず、把握を容易にするために出土状況からA～D群を設定した。

A群：本坊建物跡礎石より下面の基盤整地層中から出土した一群。

B群：鍛冶関連遺構など鍛冶工房跡に伴う状況で出土した一群。

C群：表層出土あるいは表面採集など本坊建物跡の存続期間と時期を同じくするものが主体と考えられる一群。

D群：1588年と推定される火災層直下で出土した一群。

（2）A群の土師質土器

A群の資料は6点確認している（図1）。43は杯で、逆台形状を呈しており、口径に比して底径が小さく、器高が高い。体部中位で変換し、外反する器形などから杯B類〔幡上2005〕と判断できる。そのほか底部から大きく開く体部をもつタイプ（32、44）や、大小2法量の皿（46、31）が出土している。底部切り離しは32、46が回転系切り、ほかは不明である。A群の資料は薄手のものが多く、色調は総じて「にぶい橙～浅黄橙色」の白色系である。

（3）B群の土師質土器

B群の資料は5点確認している（図2）。4は内湾器形の皿で、内面体部下半に細かい単位のヘラ状工具痕が観察される。ほかに底部からの立ち上がりの角度がきついタイプ（6、29）や、小皿（28）、皿（5）がある。B群の資料中には、見込みにヘラ状工具による回転ナデが施されるもの（28）もあるが、外面の調整痕は目立たない。底部切り離しはすべて回転系切りである。色調は総じて「橙色」を呈している。

（4）C群の土師質土器

C群の資料数は本坊跡の中で圧倒的に多く、器種・器形など最もバラエティに富んでいる。形態、調整、法量、色調・胎土、底部切り離しなどの諸特徴からグルーピングする（図3）。

i）極小皿・小皿・皿

先行研究では、器高を基準とし、2.5cm以下を「皿」、3.0cm以上を「杯」、中間的な法量のものを「小杯」と区分している〔幡上2005〕。破片資料が主であり、類型化できるだけの十分な資料数が得られていないが、「杯」、「皿」に加え、新たに口径6.5～8.5cm、器高1.5～2.0cm、底径5.0～6.0cm内

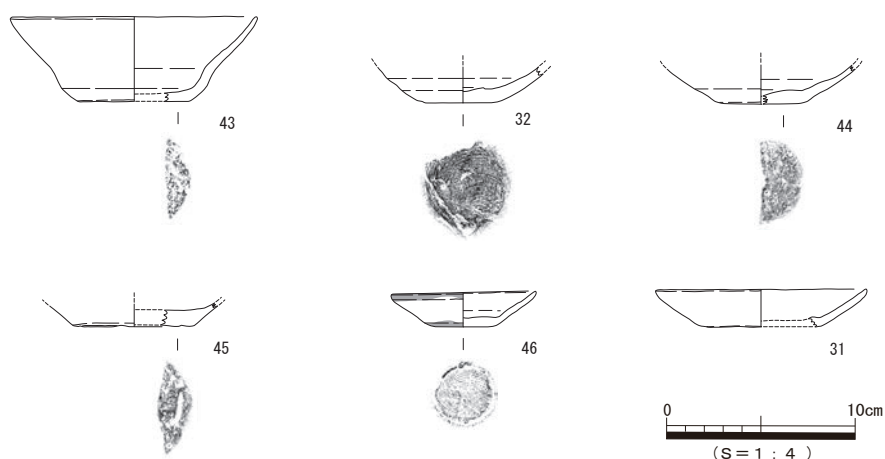


図1 I区本坊地区出土 A群の土師質土器

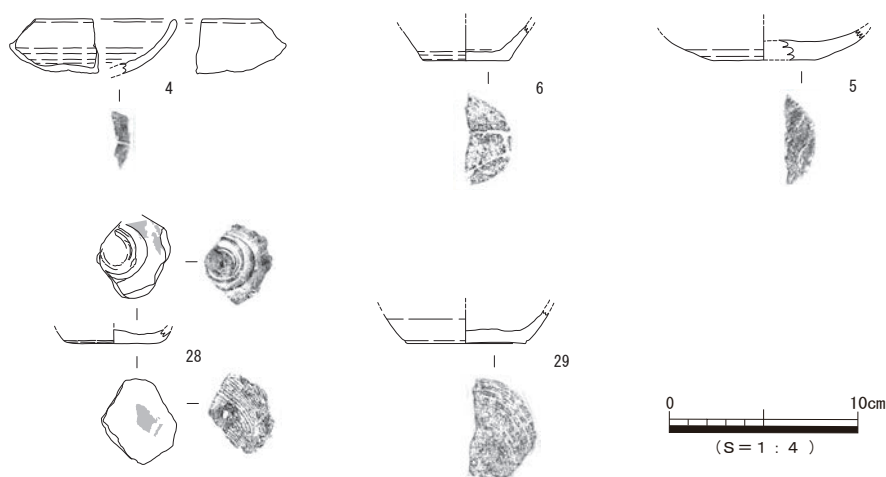


図2 I区本坊地区出土 B群の土師質土器

外のものを「小皿」、推定口径 5.0 ～ 6.0cm、推定器高 1.5 ～ 2.0cm、底径 4.0cm 以下のものを「極小皿」として器種設定しておきたい（図3－47、55、58）。以下、皿は諸特徴からグルーピングする。

皿①グループ 底部から直線的に立ち上がる器形で、非常に厚手のタイプ。明瞭な調整痕をもたない。復元口径 7.8 ～ 10.0cm、器高 2.5 ～ 3.0cm、復元底径 5.0 ～ 7.0cm を測る。すべて「橙色」を呈しており、底部切り離しは静止糸切りである（図3－60、61）。

皿②-a グループ 底部から内湾しながら口縁部にいたる器形で、やや薄手のタイプ。内外面に明瞭な調整痕をもたず、器面は平滑である。復元口径 11.0 ～ 11.6cm、器高 3.0cm、復元底径 7.0 を測る。「橙色」を呈する（図3－64）。

皿②-b グループ 底部から内湾しながら口縁部にいたる器形で、やや厚手のタイプ。外面にヘラ状工具による多段ナデが施される。復元口径 9.8 ～ 12.8cm、器高 3.0cm、復元底径 4.4cm を測る。「橙色」を呈する（図3－63、66）。

ii) 杯

杯①グループ 全体形状は不明であるが、見込みに幅広の回転ナデののち、一文字ナデが施されるタイプ。復元底径 4.0 ～ 4.8cm のものを確認している。「橙色」を呈し、底部は回転糸切りによる（図 3 - 69）。

杯②-a グループ 底部からきつい角度で立ち上がり、直線的に口縁部にいたるもの。外面にヘラ状工具による多段ナデが施される。復元底径 5.5 ～ 6.5cm を測り、色調は「橙色」である。底部切り離しは回転糸切りによる。杯 G 類〔幡上 2005〕に相当する（図 3 - 71、74）。

杯②-b グループ 全体形状は不明であるが、底部からきつい角度で立ち上がるタイプで、内外面に明瞭な調整痕をもたないもの。器面は平滑である。復元底径 4.3 ～ 5.2cm を測り、色調は「橙色」である。底部切り離しは回転糸切りによる（図 3 - 77）。

杯②-c グループ 全体形状が不明で、底部からきつい角度で立ち上がるタイプのうち、杯②-a、杯②-b に該当しないものを含めた（図 3 - 78）。

杯③グループ 底部が肥厚し、全体的に厚手のタイプ。見込み外縁部にヘラ状工具による圏線、外面に多段ナデが施されるものが多い。底径 6.0cm 前後のサイズで占められ、色調は「橙色」を呈する。底部切り離しは回転糸切り（図 3 - 80、83）と静止糸切り（図 3 - 92、93）がみられ、細分が可能である。静止糸切りは底部の肥厚化が顕著なものに多くみられる傾向がある。杯 E 類〔幡上 2005〕の範疇に含まれる。I 区本坊地区出土資料は底部片に限られ、全体形状を推定し得なかったが、III 区庭園地区小祠跡 A 出土資料が参考になる。近隣では河後森城跡（松野町）で同タイプが多く出土している。

iii) 杯もしくは皿

底部のみ残存し、杯か皿かの判別が難しい資料についても底部の形状、調整、法量、色調・胎土、底部切り離しなどの諸特徴からグルーピングを試みる。なお、口縁部片は対象外とした。

杯・皿①グループ 全体形状は不明である。見込み中央部が、部分的に施される渦巻き状ナデにより窪むタイプである。復元底径 4.7 ～ 4.8cm を測る。色調は「にぶい黄橙～明黄褐色」で、底部切り離しは回転糸切りと静止糸切りが存在する（図 3 - 101）。

杯・皿②-a グループ 全体形状は不明であるが、底部から段をなして体部へといたるタイプと想定される。薄手のつくりで見込みには不定方向のナデが施され、器面は若干の凹凸をもつ。底径 4.2 ～ 5.0cm を測る。「浅黄橙～にぶい橙色」を呈し、底部は回転糸切りによる（図 3 - 105）。

杯・皿②-b グループ 全体形状は不明であるが、底部からゆるやかに立ち上がるタイプを大きく括った。内面はナデにより平滑である。「浅黄橙～にぶい橙色」を呈し、底部切り離しは回転糸切りである。個体差が大きいものを内包しており、課題が残る（図 3 - 112）。

杯・皿③グループ 全体形状は不明であるが、底部から内湾しながら立ち上がるタイプである。薄手のつくりで内外面にヘラ状工具による多段ナデが施される。復元底径 5.6 ～ 6.0cm を測る。「橙色」を呈し、底部切り離しは回転糸切りによる（図 3 - 115）。

杯・皿④グループ 全体形状は不明であるが、見込み中央へ向かって器壁が薄くなるタイプである。外面にのみヘラ状工具による回転ナデが施され、内面はナデにより器面が平滑なものが多い。復元底径 5.6 ～ 6.4cm におさまる。「橙色」を呈し、底部は回転糸切りによる（図 3 - 118）。

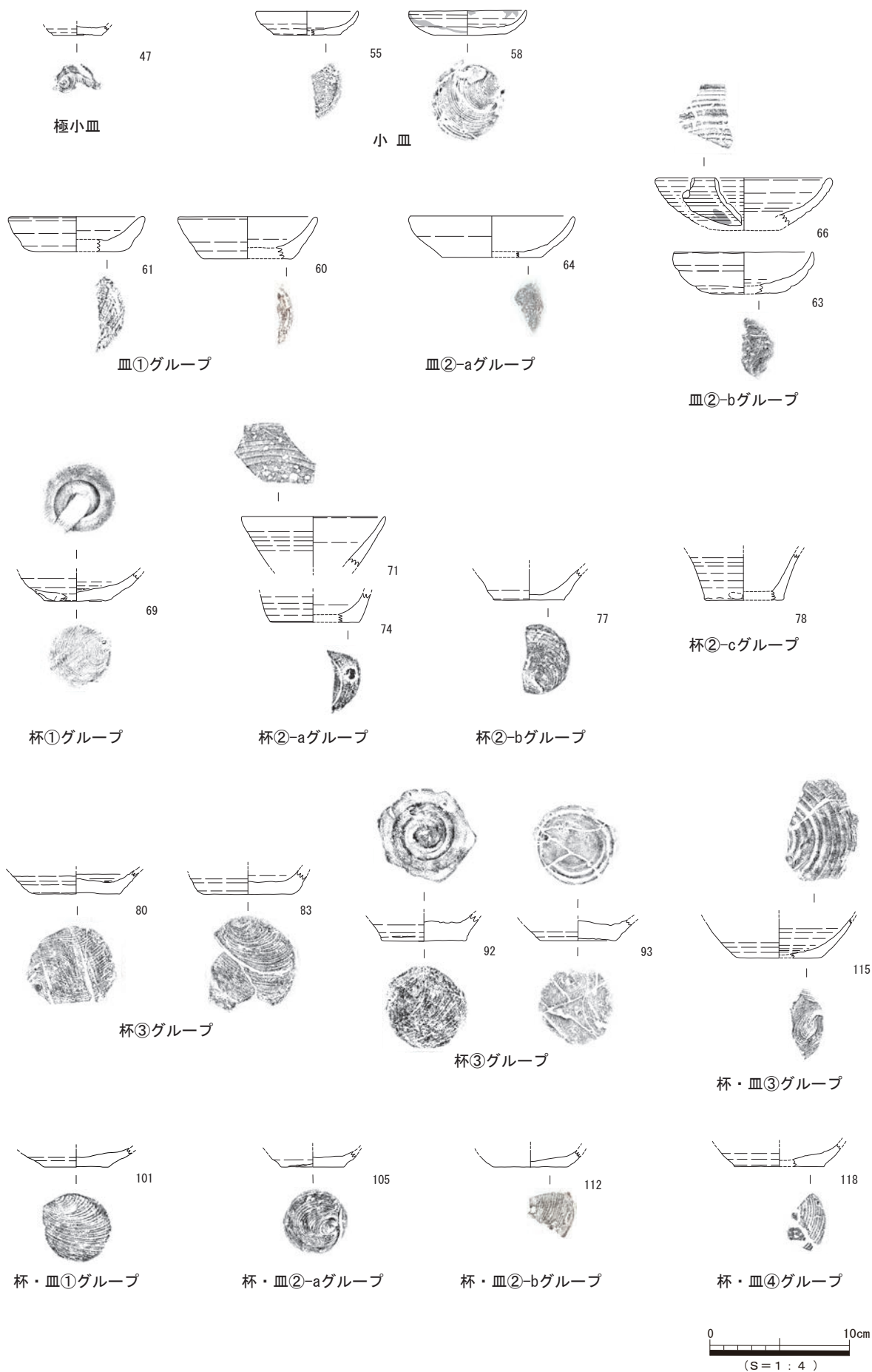


図3 I区本坊地区出土 C群の土師質土器

iv) その他の器種

杯・皿類以外のものとしては小型の火鉢や、香炉の脚部片などが出土している。

（5）D群の土師質土器

D群は1588年と考えられる火災層直下で出土した一群で、3点を確認している（図4）。42は扁平な皿で、40、41は皿と杯の中間的な法量である。薄手のつくりで、体部中位で変換し、やや外反する。見込みにはへら状工具による回転ナデの痕跡が観察される。底部は回転糸切りで、色調は総じて「橙色」である。

参考資料として2点挙げておく。437はII区本堂跡裏斜面の焼土面直下から出土した皿で、底部から大きく外反する形状を呈する。回転ナデにより丁寧な器面調整が施されている。精緻な胎土で、色調は「灰白色」である。127はI区本坊地区出土・採集で、437と共通する。

4 II 区本堂地区出土の土師質土器

II区本堂地区出土・採集資料は少なく10点にも満たない（図5）。小皿（439、438）や小振りな皿もしくは杯（441、433）を中心に構成され、「にぶい橙色～橙色」を呈する。424、425は底部からの立ち上がり強いタイプで杯G類〔幡上2005〕に似るが、焼成が非常に堅緻で硬質な特徴をもつ。440は円盤高台状の底部からきつく立ち上がる形状で、色調は「浅黄橙色」である。宇和島市三間町所在の新田神社遺跡採集品中に類似資料を確認している。

5 資料の検討

（1）変遷と年代的見通し

i) 変遷の概要

先に示した出土状況A～D群は、発掘調査により明らかとなった遺構変遷と対応させることで、概ね次のように年代を付与することができる。

A群：本坊建物跡礎石より下面の基盤整地層から出土した一群で、15世紀前半頃と推定される。色調は「にぶい橙～浅黄橙色」の白色系で占められ、本資料群に含まれる杯B類〔幡上2005〕は、先行研究で示された年代観と一致する。

B群：鍛冶工房跡に伴う遺構から出土した一群で、15世紀後半頃と推定される。図2－28の小皿など見込みにへら状工具による回転ナデを施すものがみられるが、外面の調整痕は目立たない。色調は「橙色」である。A群資料と系譜関係を捉えられず、時間的隔たりが存在する可能性がある。

C群：表層出土あるいは表面採集など本坊建物跡の存続期間と時期を同じくするものが主体と考えられる一群で、15世紀末～16世紀後半頃の時期幅で捉えられる。器種・器形のバリエーションに富み、様々なタイプを内包するため、系譜や並行関係を把握するのは難しい。多くは「橙色」のもので占められる。

D群：1588年と考えられる火災層直下で出土した一群で、16世紀末頃の所産と推定される。C群ではみられない薄手、外反器形の新たなタイプが出現する。色調は「橙色」で、「白色」のものもみられる。

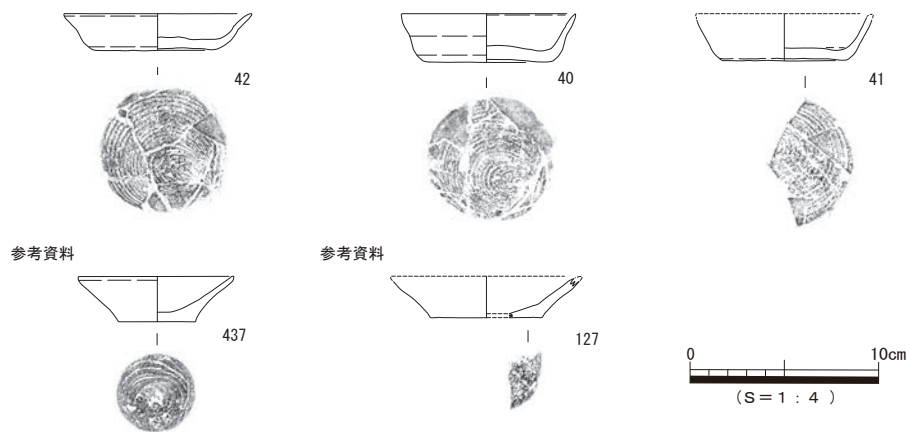


図4 I区本坊地区出土 D群の土師質土器

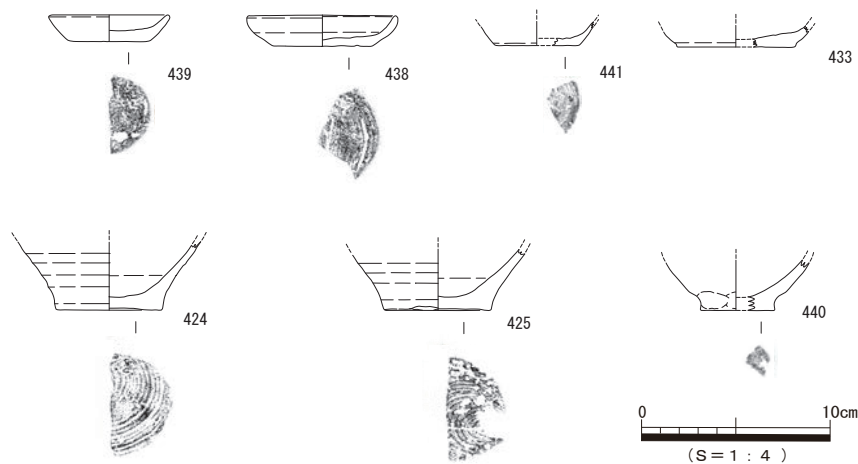


図5 II区本堂地区出土の土師質土器

ii) C群の系譜・並行関係について

現状ではC群は15世紀末～16世紀後半頃という時期幅でしか捉えることができず、その上資料の残存状態も相まって、各グループ間の先後関係やC群内での年代的位置づけは判然としない。しかしながら、調整、色調・胎土、底部切り離しなどを手がかりに、内外面の装飾化（ヘラ状工具による回転ナデ）や器壁の肥厚化、粗雑化を基調的な変化とみれば、以下に示す1→2→3→4の推移は想定できよう。

- 1 B群：内面に調整痕があり、外面にはみられない。内外面ないものもある。色調は「橙色」で、回転糸切り主体（図6－4、5、6、28、29）。
- 2 C群：杯・皿④グループ 内面に調整痕はなく、平滑に仕上げる。外面にヘラ状工具による回転ナデ。「橙色」。回転糸切り（図6－118、119）。
- 3 C群：杯③グループ 内面見込み、外面にヘラ状工具による回転ナデ。底部がやや肥厚する。「橙色」。回転糸切り主体（図6－80）。

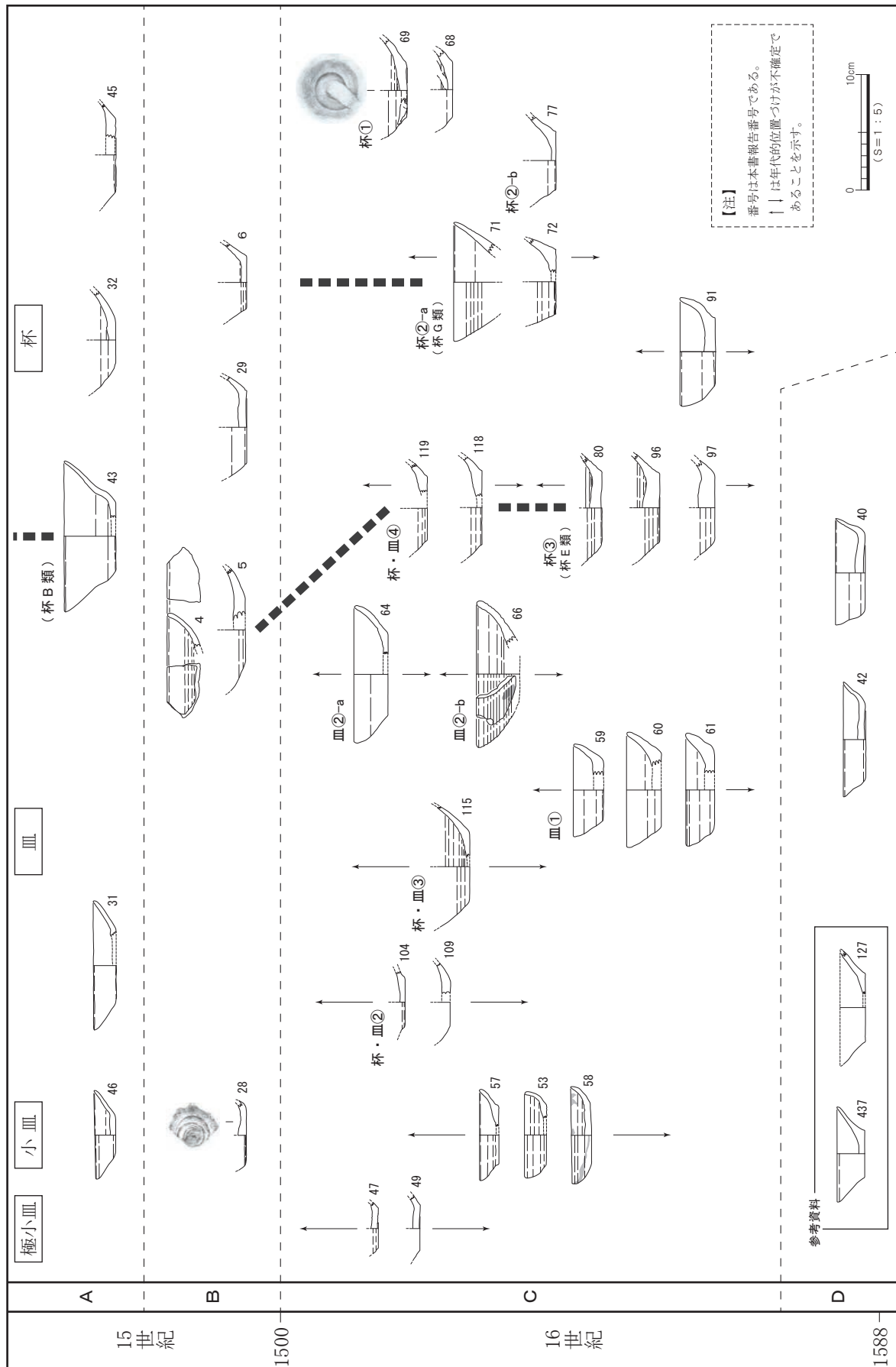


図6 平坦部A I 区本坊地区出土 土師質土器の変遷試案

4 C群：杯③グループ 内面見込み、外面にへう状工具による回転ナデ。底部の肥厚化が顕著。「橙色」。静止糸切り（図6－96、97）。

加えて、内面見込みの調整痕は不明瞭ながら、肥厚した器壁をもち、「橙色」、静止糸切りなどの特徴をもつ皿①グループ（図6－59～61）は、杯③グループ（図6－96、97）との共通性が窺え、これと並存する可能性が高い。また、杯①グループは内面見込みに幅広の回転ナデののちに一文字ナデが施されるものを括ったが、同様のタイプは西予市所在の松葉城跡採集品や音地遺跡出土資料などに顕著にみられ、西予市宇和地域の特色と言える。等妙寺旧境内の出土は僅少であることから、宇和地域からの持ち込みなど2次的にもたらされたのであろう。西予市音地遺跡SD1の出土例から16世紀前半頃を下限と位置づけておく（図6－68、69）。

（2）Ⅰ区本坊地区及びⅡ区本堂地区出土資料の特徴と予察

最後に今後の展望も含め、所見を述べておきたい。検討資料はすべて回転台成形のもので占められており、底部切り離しは回転糸切り主体であった。静止糸切りは16世紀代になると、杯③グループや皿①グループなど一部タイプにのみ認められる。一方、回転へう切りによるものが過去報告資料中に1点確認された（本書報告番号803）。全体数の中ではごく少量と思われるが、底部切り離し不明としたものの中に該当資料が含まれる可能性もあり、注意を要する。

繰り返しになるが、Ⅰ区出土資料は様々なタイプを内包しており、諸特徴からまとまりを捉えてもなお同一系譜で考えにくい状況が見受けられた。これが時期差に起因するのか、あるいは土器生産の動態を示しているのか検討の余地がある。また、器種構成を見ると低平な皿形態がほとんどみられず、小振りの杯・皿が主体となる点は注目される。すでに研究の蓄積がなされた西部瀬戸内地域周辺に目を向けると、「15世紀後半頃には低平な皿が普及し始め、16世紀にかけて主流となる」傾向が広く看取される〔池澤2004など後掲参考文献〕。当該期における研究の対象は城館跡が大多数であることは考慮すべきであるが、小振りの杯・皿を主体とする器種構成が等妙寺旧境内、あるいは南予地域の地域性と言えるのか否か今後明らかにする必要があるだろう。

Ⅱ区出土資料は少ないが、焼成が非常に堅緻で硬質なタイプ（図5－424、425）は特異である。Ⅱ区のみで出土していることから、本堂に伴う仏具等特殊な用途を想定しておきたい。

6 結語

以上、雑駁ながら等妙寺旧境内出土の土師質土器、Ⅰ区本坊地区及びⅡ区本堂地区から得られた新出資料について、先行研究を踏まえながら様相を整理した。資料の状態や出土状況に制約があるため、発掘調査の進捗に応じて今後も検証を継続していかねばならない。

特にバリエーション豊富な15世紀後半～16世紀代の資料群、本検討でいうB群、C群については、松野町域や宇和島市域など近隣地域出土資料との相互比較により、グルーピングの妥当性の有無を検証することで、年代的位置づけや土器生産・流通の動態、地域性の問題等に迫れるものと考えている。後日を期したい。

関連資料の調査にあたっては以下の方々や機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

宇和島市教育委員会、愛媛県歴史文化博物館、兒玉洋志、西予市教育委員会、高木邦宏、高山剛、富田尚夫、西澤昌平、松野町教育委員会（敬称略）

【参考文献】

池澤俊幸 2004 「四国における古代後期から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究ⅩⅧ』

今治市教育委員会編 2019 『史跡 能島城跡―平成 15 ～ 27 年度整備に伴う調査総括報告書―』

（財）愛媛県埋蔵文化財センター編 1998 『湯築城跡』第 1 分冊

（財）愛媛県埋蔵文化財センター編 2003 『常定寺遺跡 音地遺跡 伊崎越遺跡』

北島大輔 2010 「IX 章大内式の設定―中世山口における遺物編年の細分と再編―」『大内氏館跡Ⅺ』山口市教育委員会

鬼北町教育委員会編 2005 『等妙寺跡―平成 11 年～平成 16 年度学術調査に伴う埋蔵文化財調査報告書 第 7 集―』

長 直信 2018 「第 2 章大友氏館跡出土の土器と権力―その様相と特質―」『戦国大名大友氏の館と権力』吉川弘文館

幡上敬一 2005 「第 2 節 遺物」『等妙寺跡―平成 11 ～平成 16 年度発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第 7 集―』鬼北町教育委員会

松野町教育委員会編 1999 『史跡 河後森城跡―現在までの調査と成果―』

松野町教育委員会編 2019 『予土境界地域における中世遺跡群の調査』